連載

チャレンジする Someone NEWS ～挑戦者の履歴書

第⑭回

菅建彦 氏（公益財団法人交通協力会顧問）
――鉄道の歴史と文化の伝道者

一般社団法人 洸楓座　代表理事　佐藤 建吉

▼イギリスでの出会い…ブルネル

1994年8月、27年も前になるが、筆者は研究滞在で夏休みからロンドン郊外のブルネル大学に滞在した。機械工学科のストラスキー教授の研究室に身を置いた。当時、「コースティックス法」と呼ばれる光学的接触解析法を「転がり接触疲労」に適用するためであった。その手法は、軸受や鉄道車輪などのころがり損傷に応用できる。実験装置の開発で、同学科の機械工場（ワークショップ）の責任者、ロバート・ウェブ氏と親しくなった。彼は、毎日ブルーのネクタイをしていた。そのネクタイのいわれを聞くと、ついて来なさいと、私をキャンパスの端にある窪地に連れて行った。

そこにあるのは、一段下がった長さ50㍍以上の直線状窪地であったが、それはイギリスの鉄道エンジニア、イザムバード・キングダム・ブルネル（1806～1859年）が敷設した超広軌鉄道の切取り部（高低差を小さくするために切り取った長い窪地）の一部であった。それは、ウェブ氏が抱く「偉大なエンジニア、ブルネル」にゆかりの遺構であった。ブルーのネクタイは、ブルネル協会のメンバーズタイであった。こうして大学の名前となっているエンジニア、ブルネルとの出会いがあった。

すっかりウェブ氏の心情に影響を受けた筆者は、IDをもらっていた同大学の図書館で、開架されているブルネルに関する書籍や資料を調べた。さすがに沢山ある。

久し振りにお会いした菅建彦氏

▼菅氏との出会い…ブルネル＆スチーブンソン

今回は、菅建彦氏を紹介するのであるが、ブルネルとの関わりから始まった。実はそれは、菅氏と筆者との関わり、同時に鉄道との繋がりでもあったからである。1987年に菅建彦氏は、名著『英雄時代の鉄道技師たち』を上梓している【註1】。同著では、第一部にロバート・スティーヴンソンを、第二部にイザムバード・キングダム・ブルネルを解説している。その構成において、第一部は15章で112㌻、第二部は19章で143㌻となっており、ブルネルについて多くのページを割いている。

日本人は、ロバート・スティーヴンソン（1803～1859年）については、周知してはずであるが、ブルネルについては未知の人が多いのではないだろうか…。菅氏も以下に述べるようにイギリスに駐在し、イギリスの鉄道の発展においてブルネルは話題の多いエンジニアであるとの表れであると思われ、嬉しい。なお、ブルネルの名前は、鉄道に関するデザイン賞である「ブルネル賞」に冠されている。

菅氏と筆者の最初の出会いは、2004年12月11日であると思われる。それは、日本機械学会の技術と社会部門の恒例講演会「過去から未来を訪ねる」の筆者の企画で、講演をお願いしたことに始まる。プログラムには、『エンジニアの魁（さきがけ），ブルネルとスチーブンソンの対比』菅建彦（交通博物館）とある。

ここで、菅建彦氏の経歴を紹介させて頂く。

1940年　東京生まれ
1965年　東京大学法学部卒業
同年　日本国有鉄道に入社、東京鉄道管理局、金沢鉄道管理局、本社職員局、藤井総裁付秘書、経理局勤務
1980年　国際観光振興局ロンドン観光宣伝事務所勤務
1983年　帰国、国鉄に復帰し経理局、自動車局に勤務
1986年　パリ国鉄事務所長
1987年4月から　東日本旅客鉄道（株）パリ事務所長
1992年　帰国
1993年　東日本鉄道文化財団専務理事
2003年　交通文化振興財団理事長兼交通博物館館長
2007年　交通協力会理事長、同会長を経て2019年から現職

などの仕事を経験されている。

筆者と出会いとなったお世話になっていたが、今回、有楽町の交通協力会の事務所を訪問し、2年振りに菅氏を訪問し、本コラムに向けてインタビューした。

▼鉄道文化の発展

機械学会の講演会の後、筆者は2005年に千葉大学で菅氏に講義して頂いた。いわゆる一般教養科目で、「科学技術と現代社会」という科目で。ブルネルの事績ほか、技術史について多くの知識を得た方々に講義して頂いた。菅氏には、『科学技術と博物館の役割』と題してお願いした（2005年7月）。その講義で菅氏は、「博物館は社会の記憶装置の一つである。」と述べられたが、それは「次の世代に伝える記憶装置としての博物館」という視点でもあった。

また筆者は、日本技術史教育学会誌の編集長をしていたので、千葉大学での講義概要を寄稿して頂いた【註2】。その中で、菅氏は、博物館の機能には「資料の収集・整理・保管」「調査研究」「展示」「教育普及」の四つを上げ、目的機能と方法機能があるとした。

交通博物館は1921年（大正10年）に鉄道省が鉄道開業50周年記念事業の一つとして、東京駅北側にあった鉄道博物館が、秋葉原駅近くの神田須田町に移転したもので、その後、交通博物館と改称、国鉄民営化後はJR東日本が運営していた。この交通博物館は2006年に閉館となり、翌2007年には同館の所蔵品を受け継いで大宮に鉄道博物館が開設されたので、菅氏は最後の交通博物館長となった。新設の鉄道博物館のあり方について、様々な意見を具申されたとのことである。

そうした関係から大宮の鉄道博物館の建設中に、特別に菅氏に現地案内をして頂いた。これは、同行した千葉大学学生が卒業論文「博物館／美術館を核とした都市づくりにおけるコンテクストの復権」の中に取り纏めている。

▼鉄道技術と文化の伝道者として

菅氏は、ロンドンとパリに駐在されて、鉄道に関する発展における欧米の歴史と動向について詳しい。その視点には、「鉄道の父」のロバート・スティーヴンソンと他のエンジニアの登場と割拠を知り背景とされている。同時に「天才エンジニア」といわれるブルネルについての理解と評価という面で特異である。そうした視点を持たれた理由を、今回のインタビューでお聞きすることが出来た。

それによれば、先述したように菅氏は、国鉄入社し、土木建築界の重鎮の藤井松太郎国鉄総裁秘書としての職務から、応対する鉄道関係の技術者から、係る技術と技術者像について直に学ばれ、しかも経理部門の職務、そして法律知識により、技術を評価する眼力と一家言を持たれたようだ。

さらに鉄道の発祥地のイギリスに行かれ、鉄道の発展の歴史と現場、その背景などについて踏査された。中でも、関心を持たれたのが、スティーヴィンソン父子とブルネル父子の相違や対比であった。それを、日本鉄道施設協会発行の月刊誌「鉄道土木」に1984年8月号～1986年2月号に『英雄時代の技師たち』として連載されたという。

今回、単行本となった『英雄時代の鉄道技師たち』を読み直したが、その中に綴られているなかに、菅氏ならではの現場を踏査し理解した多彩な視野からの筆づかいを感じられた。それはロンドンとパリでの経験に根差すものだろう。

また、東日本鉄道文化財団移籍後に書かれた『世界の鉄道発達小史』も、同じく鉄道の歴史と技術について展望であり集大成である。菅氏でなければ書けないまさに世界的かつ過現未のパースペクトであるといえよう。とくに、鉄道文化の血潮が文中に盛り込まれていることが特徴である。この小史は、展示会『鉄道と絵画』の図録に書かれたものである【註3】。

ブルネル大学にあるブルネルの念像（ブルネル生誕200年記銅像で造られた）

その小見出しを列挙すると次のようである。

「鉄道の起源」「蒸気機関車の開発と蒸気鉄道の誕生」「鉄道網の拡大と土木技術の発達」「大都市の鉄道ターミナル」「世界に広がる鉄道」「辺境の克服―大陸横断鉄道」「巨大技術の実現―長大トンネルと大橋梁」「都市鉄道の発展」「鉄道が育んだ大衆文化」「黄金時代から凋落へ」「鉄道の未来を拓いた日本」。

このように技術は、誕生と開発、そして進歩と転換という過程を経る。技術は、つくられ活かされるが、そこには人間が関わり、多面的な視野や判断が必然である。その局面で菅氏は、海外事情に詳しく、しかも技術管理と法律財務管理にも明るい視点は、鉄道文化の伝道者としては適役である。そうした局面を、著作に見出すことが出来る。今回引用した『英雄時代の鉄道技師たち』と『世界の鉄道発達小史』は、秀逸である。

▼2022年は鉄道開業150年

鉄道の起源時においては、発明家や変革者としての人物の存在が重要であった。それらの人物と背景を押さえることは、今後の、将来の、未来における改革を教育としてとらえる面から重要な視点である。ここに、「過去から未来を訪ねる」という視点が生まれる。それは、「技術の歴史は人の歴史、人の歴史は技術の歴史」といえそうだ。

リチャード・トレヴィシック、ジョージ・スティーヴンソン、ロバート・スティーヴンソン、イザムバード・キングダム・ブルネルのような人物である。その局面では、機関車のほか、軌道、トンネル、橋梁、そして駅舎、信号など施設や設備の、「誕生と開発」という黎明期から、「改良と変革」という発展期の技術史となる。これらは、欧米が土俵であったが、その後は日本の時代になる。日本の、とくに国鉄の役割は大きい。狭軌鉄道の制約の下、安全と高速化の性能向上へ取り組みと実践は、自動車や飛行機というライバルの侵攻から、「新幹線」を登場させ変革を世界につくり出した。その中にも、国鉄の鉄道と土木のエンジニアの役割は大きいといえる。

来年2022年10月は、日本で鉄道が開業して150年になるという。イギリスに約半世紀遅れてスタートした日本の鉄道は、その後急速に発展して先進国に追いつき、今では世界をリードするようになった。菅氏が顧問を務める交通協力会は、国交省、JR各社、民営鉄道協会などすべての鉄道関係者の協力を得て、『鉄道百五十年史』の編纂に取り組んでいるそうである。内外の鉄道の歴史と社会的・文化的背景を熟知する菅氏に、鉄道の歴史と文化の伝道者としてさらに活躍してもらいたいと思う。

鉄道は、その技術、さらに文化という面で筆者にとっても興味深い。鉄道には子供から大人まで多彩な鉄道マニアがいる。日常の暮らしにおいて必須な都市交通手段であり、走る機械である。鉄道に魅せられる心象には原点がある。その深淵を知る菅氏には、今後も大いに語り綴っていただきたいと思う。

【註1】『英雄時代の鉄道技師たち』―技術の源流をイギリスにたどる、山海堂、1987年発行。
【註2】『科学技術と博物館の役割』、技術史教育学会誌（第12巻第2号、p3～7、2011年）。
【註3】『世界の鉄道発達小史』、鉄道と絵画（p231～235、西日本新聞社、2003年）。